

15
1544
1



門 45
號 1544
卷 1



田耕筆

志海人乃かゝれるをぬのえりし
是得しるしものくはくを及古れしはし
小書付置しるはさぬのら控さるん茂情む
し書はあてえせしやそしれし人く乃
あはれしつれまはまにしは進を後しをも
さしえぬの五雜俎の款してみまらひて天地
人お事やうからしてあれる古乃中より理
見出るまに虫のほ又さしゆりしれし
まはるまのけ類ふ花のれておのい出れ
こもめはつらくはあまもれし人乃
まらふいしはなんとされおのら免

走來幾部著書成祇遺
屏居遂嬾情最是紙田
閒不得長遭筆耒四時
耕

此予卜居閒田廬之初林泉院六如尊者見惠
此作真知予平生者也及至此書遂取之以右
焉故揭之卷首云 己未冬月 萬世識

岡田耕筆卷之一

天地部

岡田廬萬蹟著
男伴資規直樹校

○長庚星と考へた夕豆部と中れつりぬ濁る和名抄
中不豆とあるに二やたふ濁るふとありて中とありたり
此詞の如きの詩小雅人東海西有長庚のトれも傳に
日既入謂明星為長庚廣續也とありふとあるをさうり
はくの名ふと下れしとての濁るぶとありて平み考
をめては貝系表の日本釋名をたれり夕の日につき
てゆれいしと解せられりともいひては濁の事いひれり
万葉第二のうらなふとていひつりてゆれと仮名まふり

凡そ此の流傳の義より廢棄しぬる事とす

○七夕に半女使今の鏡の如く一々言ひついで
百葉集より新しきものも詩事乃人の心もさう
眞の事一のつぶさなりぬらふ或人其れ味背より
偽をまふ侍つる一の事と云ふ或はまの事
かろしき事され邪多しやちかひの事
まうらふりもりもり人の例ふ事と云ふ一この如
にあらるといふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
ひらたみと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
二軍使會の俗説の天との列宿を汚穢せるものや
つるにうらやを經儒の本或る事と云ふ事と云ふ事

かきより春はむらさきと云ふ事と云ふ事
若かりけむ半れゆり長幼のれを失ふ事と云ふ事
いふ事と云ふ事

○と強の南方と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

○其のれ初より蒲柳の質もやれ次を畏る事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
名うと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
秋よりが事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
此は一人も云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
月光も水も流る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
吟時人初め事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

○唐の困窮はよく其に臣者出るるひて人物
制度はくれが本邦の後集刑政もいふ徳のたつ
し多ふいづて徳れども必しも彼國のたつともあつて
かつても天皇も通じてよたはる派ありし

○この人自稱て中華も華もいひて物なりしれ
この人それ徳のたつていひて天はるれ漢莫たつ
いひていひていひて中華も華もいひていひていひて
いひていひていひて水戸の大日本史に「あも中華のいひ
かつた人をいひていひていひていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひていひていひていひて
○本邦のいひていひていひていひていひていひていひて
善も悪も進み速くして省るあつていひていひていひて

真ふりて天皇と作くこと常に夫のごし民ふつたれ
り雄界紀ふ樟嶋いり者も夫弟君が父もたにふか
とありていひていひていひていひていひていひていひて
冠者去廢治り婦ありていひていひていひていひていひて
の初めいひていひていひていひていひていひていひて

○中身より威權藤氏よりし政勢令くもよにさやがて
此權平氏よりつり源二位よあて急進補使の任とありて
四徳公帝れらつていひていひていひていひていひていひて
統連綿せよあやいひていひていひていひていひていひて
あつていひていひていひていひていひていひていひて
率よいひていひていひていひていひていひていひていひて
腐儒もありていひていひていひていひていひていひていひて

子もぢくもは彼にたを將女服とゆるは義海は縁よりし
○本邦の人と殺むとばたけびき女の人のまふ罪あるも
死一とせしめて流刑の處せしは源頼朝平氏とほろりし
内府とけし外斬罪兼首ふりしなりこそ女佐佐保つべ
刑とせしむるなりけりそは院宣とせしむる討討とせしむ
實れ却敵とせしむるはれ却敵の害他のもなきは法皇
の御處置よりえん元保元年治よ奉して昇永元治に
本邦の内人ふましけるは況北条氏權を握りて帝
乃遠村にめしり天と作と地を握る臨へ元弘建武より
窮よりとせし

○彼國はいふ餘ありて武とくは歴史もは穢穢とて
事柄とあやまるところにたはりも力量もそれふは

弱を今もと誇にゆるる人とは相撲をてり
考に員を考へしは元治もはひはつたり代の要人乃
教誨ゆりたされしむるは固陣とせしはよたる内なるにり
んそ二三とせしむるは罪あるにせむとてきふたされ
しむるはた罪あるにせむとて刑にせむとてきふたされ
友中とせしむるは極刑ありきと
後進しむるは肉をこぼして骨をふと信ふはつらぬ
しやしよのしは我國よりせむるは考にせむるは考にせむ
吾邦をてりしはつらぬ人考にせむるは考にせむるは考にせむ
しなむらむるはつらぬ人考にせむるは考にせむるは考にせむ
刑にり人歎とせしむるはつらぬ人考にせむるは考にせむるは考にせむ
し非非の事本はつらぬ人考にせむるは考にせむるは考にせむ

四口年一

八

按す所の地は本邦にして今く地を以て
 初らるる一類なり。和名抄曰曠玉篇曰且反耕麥地也
 廣韻耕田曠日本紀師説ハ太妹トあり是ハ其ノ事ナリ
 本紀仁賢天皇卷韓泉師曠トリ人ノ名アルト記ス
 ナラシメテ紀自注柯羅摩能岐院録トアリ録字ニ
 記スルハ其ノ事ヲ説クハ計字ナリト記ス又坂岡曠人
 奈人著ヤル傍別教林ハ曠字ナリト記ス其ノ事又
 ナラシメテ曠字ハ亦傳字ナリト説クナリ今録ノ言ニ
 ニ基テ其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 又其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 トリテ其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 ナラシメテ其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス

下海津とありてそのことなるも古くは海月の地なる
 ことありたり

加茂其潤氏冠祥考ふにあらば其の事ナリト記ス
 と云い復字ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス
 其ノ事ナリト記スハ其ノ事ナリト記ス

○古比の名改まりてとねど成りの年たうば遷遷と
ふたなつたたびや滄桑おまじういんかうでいさう
わびはる本盛徳のほりしあはれも今も清いなりぬは
も海をくわりて宿澤の名にあらまじり松名は清いよ
波のまも浪田舟母のちんかふらうらうのほを澤のうら
理りのをらわが所たけあひまぐわんくま本業ふは成
々のこと舟のりまは浪跡のりのからけきよのりま
ゆりされ新六はあまあまのりふまじり跡のまげら
ぬなりふせまぐわんをたかやかりたかたのりま
舟のりまのりま海舟のりまかたのりまあまのりま
かゝ烟こけたりたるのりまかたのりまかたのりま
らんかたのりまかたのりまかたのりまかたのりま

同日集巻一

○古比の名改まりてとねど成りの年たうば遷遷と
ふたなつたたびや滄桑おまじういんかうでいさう
わびはる本盛徳のほりしあはれも今も清いなりぬは
も海をくわりて宿澤の名にあらまじり松名は清いよ
波のまも浪田舟母のちんかふらうらうのほを澤のうら
理りのをらわが所たけあひまぐわんくま本業ふは成
々のこと舟のりまは浪跡のりのからけきよのりま
ゆりされ新六はあまあまのりふまじり跡のまげら
ぬなりふせまぐわんをたかやかりたかたのりま
舟のりまのりま海舟のりまかたのりまあまのりま
かゝ烟こけたりたるのりまかたのりまかたのりま
らんかたのりまかたのりまかたのりまかたのりま

同日集巻一

古

安藤為章乃其女七端の妻外はつらつらと云ふ事
は説ふより好む事ありては其母自筆より云ふ事
水乃月と書きたる入道平の御同りある事云々
まていづれも其母の御筆に云ふ事ありては
とりの御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事
水面の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事
服をまていづれも其母の御筆に云ふ事ありては
ゆづる事ありては其母の御筆に云ふ事ありては

○野寺の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
一覽に其母の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
東西伝は其母の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては

梅乃其の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
西く浦生部^{カキモリ}の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
ゆより安吉山雪野と元明天皇和銅三年の基其後同
基にして龍宮よりおんせしやの御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
元吉とぞ一院院制は龍王寺と云ふ鐘樓は龍壽鐘殿
の宸翰乃類を賜ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
家乃律院へ被延喜式にも記されたる事其母の御筆に云ふ事ありては
其母の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
○其母の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
乃其母の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
より其母の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては
信乃其母の御筆に云ふ事ありては其母の御筆に云ふ事ありては

あつた人多くさつちやうもつたんとおもつたといふと和らぐ所
を都へんえとわの八幡の邊色に和木村といふものさつちやう
○栗栖野と城ふ二河人皆さわり契沖門園家と名おとす
て是を都へ栗野と百頭とさし都郡小栗手久ふのな凡二
字とわの栗野の柵とて思つてさつちやうの母とさし加へてさつち
よとさつちやうと一住付の乃とさつちやうの母と小栗の小栗柵と
とわの柵とて思つてさつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
皆ふと名都さつちやうと一住付の乃とさつちやうの母と小栗の小栗柵と
とわの小栗と小栗柵とて思つてさつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
萬餘ともしの故三代東深古六又甲十二延喜式才十四と水司
中ふとわのなり式水室一節といふとさつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
名都栗柵とて思つてさつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と

て旅人の所収のさつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
とん乃すといふ和世河郡栗柵とて思つてさつちやうの母とさつちやうの母と
柵とて思つてさつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
○大いに二河ありと城丹波の界樫系カキヒラの西は信老の所と
つもの大なる乃とて思つてさつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
和向乃とすといふとさつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
ふとさつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
さつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
さつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
さつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と
和保や都保と名都とて思つてさつちやうの母とさつちやうの母と
さつちやうの母とさつちやうの母とさつちやうの母と

作者の事跡一お所のはとふりてつら一板者の
事跡一とらわらむとのにりしよふか年々園地
目にかしとらむ所の^御地^所の事跡一とらむ所の
戸とらむ所の年々骨板なる丹は板よりし福の紀伊
の中らふ^おの事跡一とらむ所の年々^おの事跡一とらむ所の
乃^お事跡一とらむ所の

○山崎紀伊那ふ依法の里あり三代有縁貞觀十三
年同八月ふ割りて百姓道蘇の地を定^しり一條ふ
下依法上依法と^おの事跡一とらむ所の依法寺の延喜式
にも九系道蘇之單更留^{ヒキ}概^{ヒキ}於橋頭^{ヒキ}とらむ所の世
に依法を系と^おの事跡一とらむ所の小川の事跡一とらむ所の地蔵
寺の事跡一とらむ所の此蘇所よふ小名^おの事跡一とらむ所の

石像乃^おの事跡一とらむ所のありし^おの事跡一とらむ所のありし

○朝鮮國初の^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の
とらむ所の事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の

○尾張乃^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の
乃^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の
乃^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の
乃^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の^おの事跡一とらむ所の

尾張一

尾張一

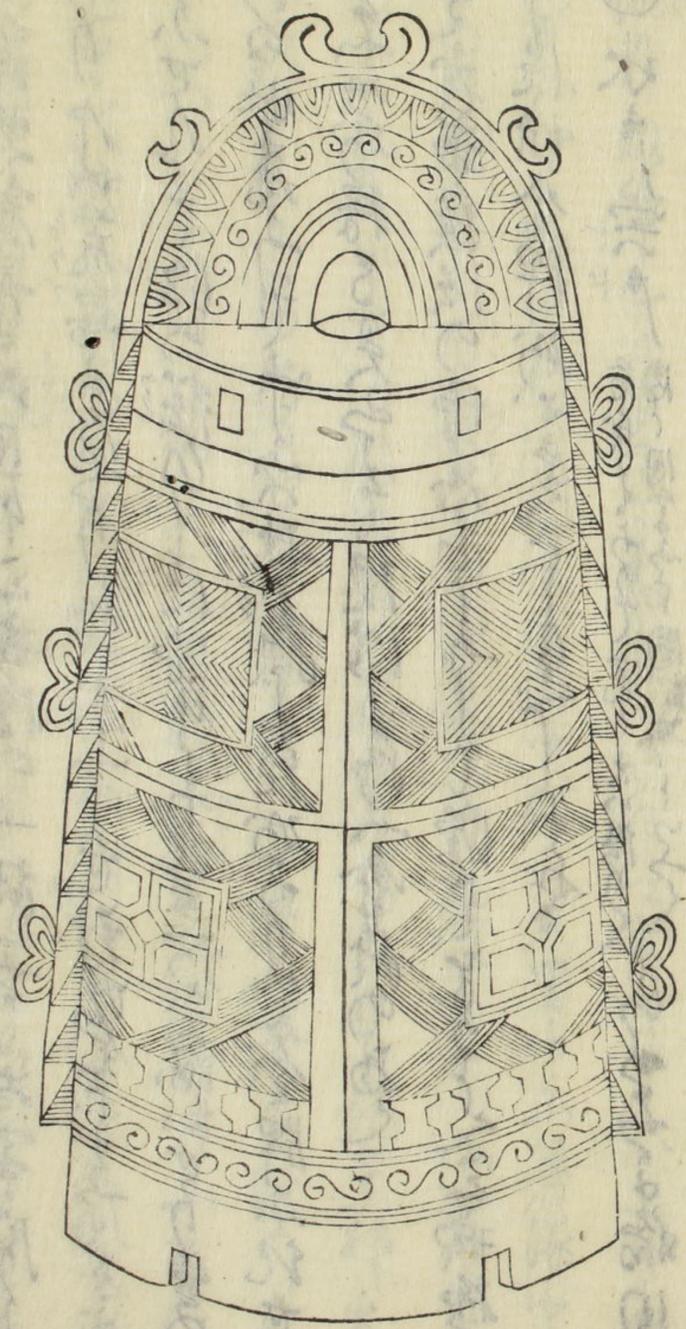
石見國邑知郡岩屋村

静窟圖



茶師佛の画像の中より鑑定せしとあるもの
 其、漆師と中食をうけてあるものなり
 懺悔の心ありて深きものなり
 此より名ふべき甚多しものなり
 圓のらふ出ぬる舊法も討て取つて又別の記あり
 ○さげの四年壬子年果国二月廿七日より廿九日及び三
 河小幡美那村^{カハハ}の比と修補するやして
 出せし一奇物を銅鐸^{トウキョウ}と云ふなり二分重九貫目
 なるもの一枚又重八貫目なるもの一枚同く比の彫刻
 甚密なり昔貞觀二庚辰東八月十四日辛卯三河國獻銅
 鐸一^{トウキョウ}三^{トウキョウ}尺^{トウキョウ}四^{トウキョウ}寸^{トウキョウ}於^{トウキョウ}美^{トウキョウ}那^{トウキョウ}村^{トウキョウ}を^{トウキョウ}山^{トウキョウ}中^{トウキョウ}獲^{トウキョウ}之^{トウキョウ}哉^{トウキョウ}曰^{トウキョウ}是^{トウキョウ}阿^{トウキョウ}
 育^{トウキョウ}王^{トウキョウ}之^{トウキョウ}寶^{トウキョウ}澤^{トウキョウ}と^{トウキョウ}云^{トウキョウ}代^{トウキョウ}實^{トウキョウ}録^{トウキョウ}の^{トウキョウ}に^{トウキョウ}云^{トウキョウ}ふ^{トウキョウ}る^{トウキョウ}を^{トウキョウ}村^{トウキョウ}に^{トウキョウ}出^{トウキョウ}す^{トウキョウ}也^{トウキョウ}

乃はと云ふ一今の世に於ては
 此より鑑定せしものなり
 其れは考へておぼしむるものなり
 此れは考へておぼしむるものなり



○流雲觀音の日本に戒壇の一跡ありて右掌府ふ
あり今ハ荒蕪の原にありて一寺を封塔と云ふも
ふでんとてはらげにせしむるを記すなり
らむ牡鹿のて中ふの村にたがかりて金牌ふ記せ
るふが釋き夫のて記はしるる會社のあり
るを右帝後法の印をてしるるを記すなり
とにに金牌ふの記すなり

○水戸の穴戸音成りありて完と云い傳の
昨と云れる小祠ありてこれ崖ありてを掘んとす
にあつるものありてこれ大なる窟ありて
彼洞ふわけてなるものありて大なる窟ありて
れは窟ありてなるものありて

官の檢をわてせしむるが一枚の重きと書入る目し
彼乃瓊々たる珠ありてこれ大なる窟ありて
まをてしるるものありてこれ大なる窟ありて
地乃此事をわてせしむるが一枚の重きと書入る目し
○大なる窟ありてこれ大なる窟ありて
これ大なる窟ありてこれ大なる窟ありて
これ大なる窟ありてこれ大なる窟ありて
これ大なる窟ありてこれ大なる窟ありて
これ大なる窟ありてこれ大なる窟ありて
これ大なる窟ありてこれ大なる窟ありて
これ大なる窟ありてこれ大なる窟ありて

○一將軍松平に田村將軍の隊に於て一株チロシをとりしが
 田のまればありて、隣に於て伐りてせしに服するも、
 伐りての業スクリをうりて、止むるを得ず、樹あり
 火出て焼つれば、農人の害なりとて、
 三島ミジマ將軍の奥將の船ユボをとり、
 居るとせん、
 中孫のこと傳へて、大工のあつて、
 小孫の樹焼亡びるる難ざし、
 又、
 あつても、
 己が庭にスエなるるも、
 うらみ、
 此の事、

○川内は海は、
 小島と、
 青柳村アヲヤナにありて、
 是れ、
 古事記コシジキに、
 古事記コシジキに、
 射野イノノにありて、
 此の、
 龍カの、
 日下ヒノに、

備矣。雖然赤鳥早翔兮。春雨點其瑞。玄兔速過兮。秋
露凝其瑞。清宮既廢矣。故今復上棟立柱以全其倖。
獨因以祝冀明謨。融四裔定焉。良弼協和。八荒安
焉。四時序季。疾病除焉。十雨順節。穀稟登焉。俯念神
明。敬聖尚。無皇慙矣。敬白

天慶八年乙巳八月二日

從四位下行木工頭紀朝臣貫之謹誌

神主正六位上出雲宿禰 貞主

工匠 無位 鞍部指足

大坂中に錦嶽といふ錦面にも錦向が嶽より錦面
と稱りて錦向といふ者なりともよきと云れ此の御遷座
の時錦を修らざりては一片のほやよれ向きよき去御部の

樹の古御樹に止れるなまもいりあるの寺日敷朝日にも
いふ大寺にも修らるる神といふ小寺といふに對しては
三座天徳日命天美鳥命二座の式内小社に入部徳大人命
一座の式内小社にて社比のふ付記又具なせられたる
とも今も思ふなりやとせれる古寺たのこし

大寺は原の内の寺といひて後乃山に月といふ寺
修らざるは原の内の寺といふ寺といふ寺といふ寺
まはれし御の寺といひては守にその寺より其
あつた朝日といふ寺といふ寺といふ寺といふ寺
余はありともいふ寺といふ寺といふ寺といふ寺
今の社比と長とが岳といふの社の長と檢とる寺といふ寺
あつた朝日といふ寺といふ寺といふ寺といふ寺

皆死絶ありてその人の居たりたる所の跡の奇異あり
凡神霊の類ありてその跡は山庵雜錄明人怒中無慚と
揮作の著書と
ありて世人局カキリテ其年月之跡及年月之外以爲ミヤ跡呼と示
されいさるる

○西岡鷄冠井カイヤより里の田畑のあらまに大橋ありて
その都より北にありて其古瓦橋の跡ありてその跡を
原流の跡あり

○つゆ河原の跡ありて老人の伝はるる八橋ありてその跡を
あらばたの跡ありてその跡を八橋ありてその跡を
跡は小橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
細いおの跡ありてその跡を八橋ありてその跡を
また作人跡ありてその跡を八橋ありてその跡を

○市名なる人ふ奥の跡ありてその跡を八橋ありてその跡を
七橋ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
小村ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
やいりてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
碑ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
とありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
石ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ふりてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
後ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を

ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を
ありてその跡を八橋ありてその跡を八橋ありてその跡を

日向のちんり様のばらとあり二三人中へ巻きてさすは
 一より相あつたむらさきくは西家の門へ兩側へ建
 てしと焼世中と猪首馬のさきで強めついで馬ふたつと
 じつあ煉をこつてあひはしりまゝにたつたりけりて
 焼亡のちんり様の精鋭乃海も用あてしつたて水
 とあつてしつてさすまらるるあつて

○南の七人六里官の中のものありしは半の二月の末
 小瓶隊よりさすまらるるあつて強めついで馬ふたつと
 じつあ煉をこつてあひはしりまゝにたつたりけりて
 焼亡のちんり様の精鋭乃海も用あてしつたて水
 とあつてしつてさすまらるるあつて

又のちんり様のばらとあり二三人中へ巻きてさすは
 一より相あつたむらさきくは西家の門へ兩側へ建
 てしと焼世中と猪首馬のさきで強めついで馬ふたつと
 じつあ煉をこつてあひはしりまゝにたつたりけりて
 焼亡のちんり様の精鋭乃海も用あてしつたて水
 とあつてしつてさすまらるるあつて

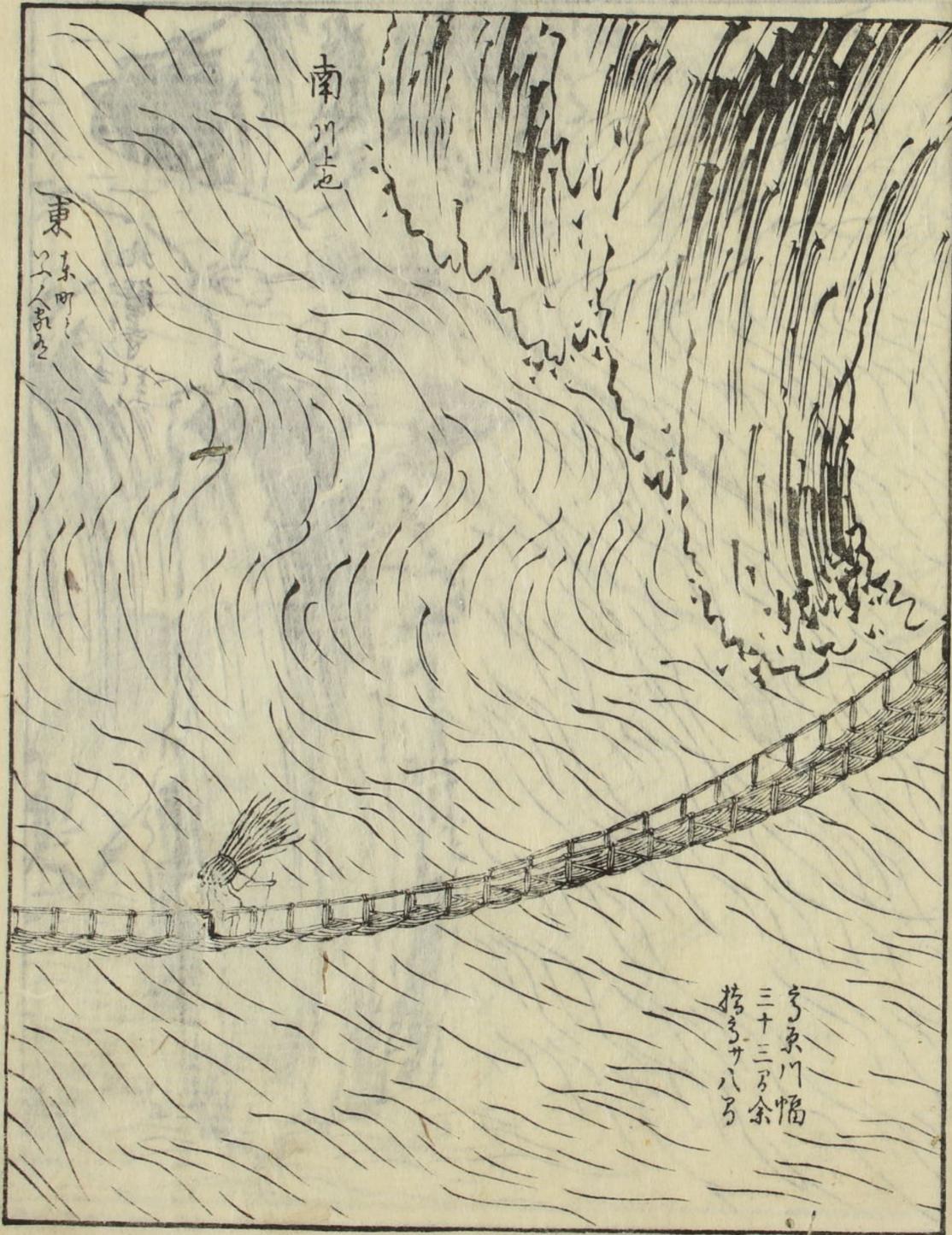
○南の七人六里官の中のものありしは半の二月の末
 小瓶隊よりさすまらるるあつて強めついで馬ふたつと
 じつあ煉をこつてあひはしりまゝにたつたりけりて
 焼亡のちんり様の精鋭乃海も用あてしつたて水
 とあつてしつてさすまらるるあつて

怪しきことありきとて何某の船が強九なるものあり
海に舟をせしめ果してはぬさうく鬼だちあつたかえん
了とてふいふめえんはさうしはさうしはさうしはさうしは
能本彼處の舟にりてたかりゆきくめのが被くちとやう
たあなうとてふりや

○幽奥のはらに思ひ出れり何某の極木の一僧の若を
学力ある位僧あつた必せても一丈のわ高木にやきふきん
とてつしにありて急高量れは杜え津土念何ふりて
やべいりし小雲うきて腐上僧あつたはさうしはさうしは
一がはらうとて思ひ出れりさうしはさうしはさうしは

○懸崖絶壁おし文吃込下へ急流迅激うて極
建しつらるる奇巧と用し極をさうしはさうしは

猿橋伝はる水内八曲橋をて國とてはとて曲橋の伝は
比名考のやうなやうなうては猿橋の國とてはさうしは
の様のなうてはさうしはさうしはさうしはさうしは
中記よりが行きててはさうしはさうしはさうしは
せらめいさうしはさうしはさうしはさうしはさうしは
村よわりのさうしはさうしはさうしはさうしはさうしは
とてはさうしはさうしはさうしはさうしはさうしは
下ふ道標の記はさうしはさうしはさうしはさうしは
建とてはさうしはさうしはさうしはさうしはさうしは
橋へさうしはさうしはさうしはさうしはさうしは
とてはさうしはさうしはさうしはさうしはさうしは
南宮へさうしはさうしはさうしはさうしはさうしは

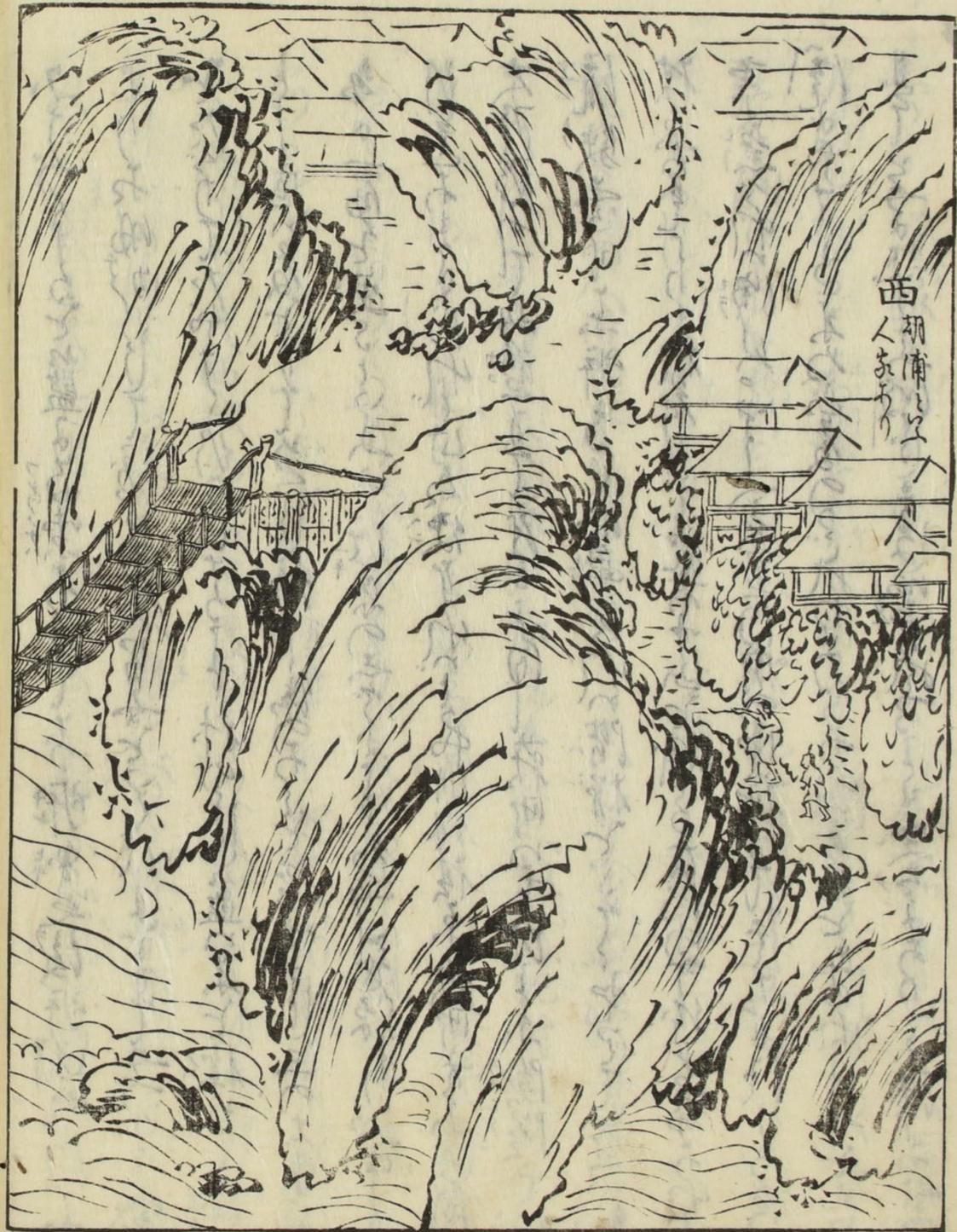


南川上迄

東

之京川幅
三十三万余
括多サ八万

之京川幅
三十三万余
括多サ八万



西

胡浦

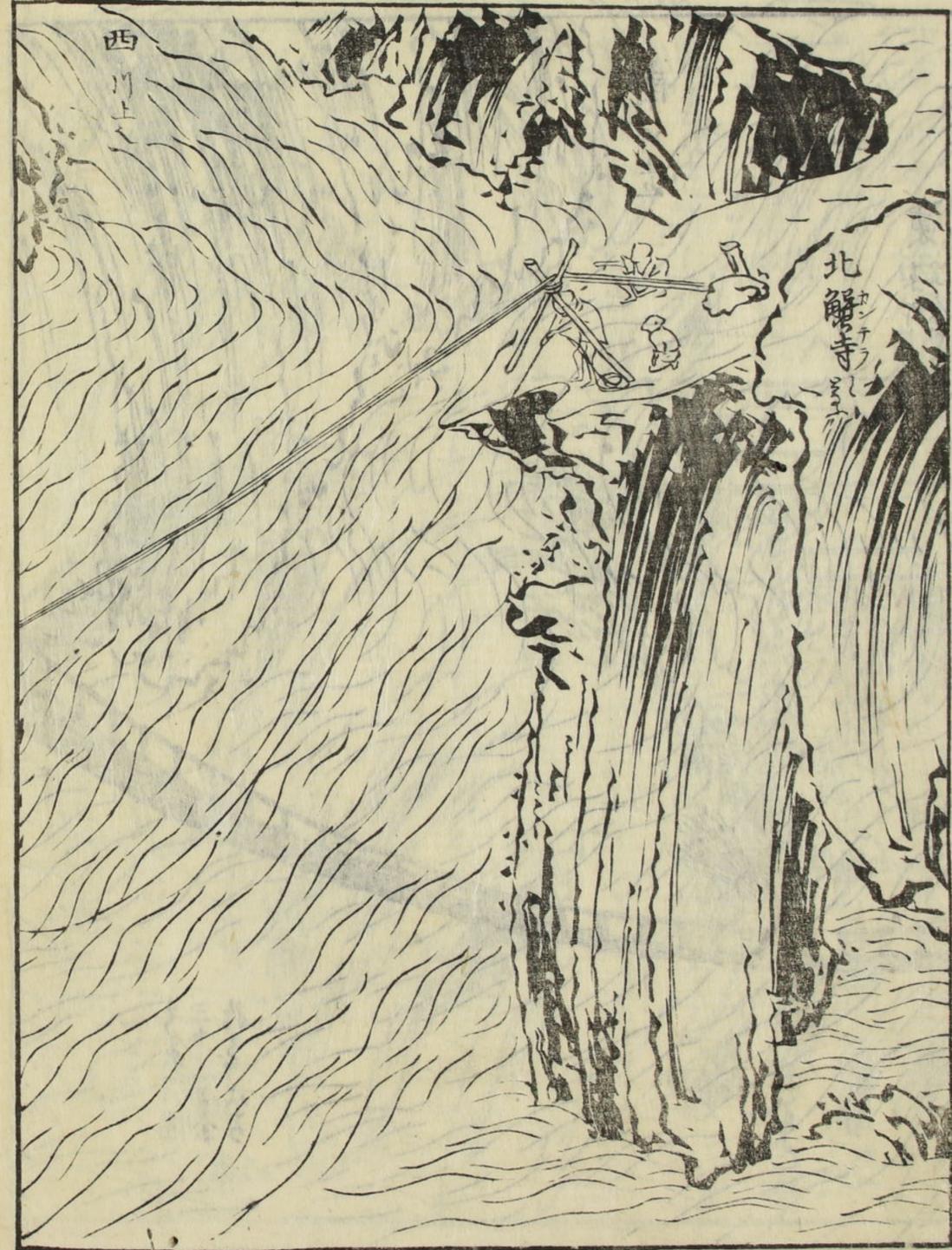


南
中流

林
十
徳
拾
余

平田
一

四十四



西
上

北
解
寺

四十四

岡田科筆
まじきんくハ俳諧の夜句なりきんくハ俳諧の夜句なり
あけすハ俳諧と藝に強きハ俳諧の夜句なりきんくハ俳諧の夜句なり
まじきんくハ俳諧の夜句なりきんくハ俳諧の夜句なり

岡田科筆卷之一終

あつたての備蓄の爲めがわきまなくとせしむれば
あねずみ畑作と並に弘くかゝるのいふゆるん
らさへいふらさへいふらさへ

77

岡田村年表第一

